現場につなぐ

新課程 GOOD プラクティス

ポートフォリオの活用

新学習指導要領では、児童生徒の学習状況やキャリア形成について、自身の変容や成長を自己評価する手段としてポートフォリオの有用性が示されている。生徒主体の教育活動への転換を目指す新潟市立鳥屋野中学校では、まず学期単位や学校行事においてポートフォリオを活用し、生徒の主体性を磨こうとしている。

実践校

新潟県 新潟市立鳥屋野中学校

校長
小川裕一
おがわ・ゆういち

教頭
内藤浩悟
ないとう・こうご

SCHOOL PROFILE

◎1947（昭和22）年開校。市内でも有数の大規模校。生徒が毎朝、校旗を掲げる「旗揚げ」は、36年間の伝統を誇る。部活動も盛んで、バスケットボール部、水泳部、陸上部などに全国大会出場の実績がある。

校　長　小川裕一先生
生徒数　829人
学級数　27学級（うち特別支援学級2）
電　話　025-285-7201
U R L　http://www.toyanojhs.city-niigata.ed.jp

メタ認知の機会を定期的に設け、自ら伸びる力を育む

新潟市の中心部に位置する新潟市立鳥屋野中学校は、2019年度、教育目標を変更して「未来を創る生徒」とし、その達成に向けた4つの重点目標と、鍛え育む7つの資質・能力を策定した（**図1**）。根底には、情報技術の進化、日本の人口減少など、社会の変化に応じた人材の育成を目指し、教育活動を生徒主体のものに転換するというねらいがある。

2020年度は、7つの資質・能力の具体化に取り組んだ。学校行事や学級活動などの特別活動がどの資質・能力を育むかを年間計画表に明記して、教員が生徒を支援・指導する際に、育成を目指す資質・能力をより意識できるようにした。そして、生徒に自己成長を促すため、ポートフォリオを活用した目標設定と振り返りの活動を3学年一斉に導入した。小川裕一校長は、取り組みのねらいにはメタ認知能力の育成もあると語る。

「生徒が自身の状態を把握、分析した上で、高めたい資質・能力を自ら設定し、目標達成に必要なことを考え、それをやろうと決心して行動する。そして、自身の活動を振り返って、成果や課題を見いだす。たとえ目標を達成できなくても、その過程こそが学びなのです」

ポートフォリオ（**図2**）は、前期・後期と学校行事で活用し、学期の始まりや行事の練習開始前と、学期の終わりや行事終了後に、ホームルームで記入する。宿題としないのは、生徒が自己と向き合う時間を時程内で保障するためだ。

◎生徒と教育目標を共有

年度初めには、教育目標の内容やポートフォリオの目的などを、学校案内＊（**写真1**）を活用しながら全生徒に説明する。学校案内では、教育目標、重点目標、7つの資質・能力について、それらを設定した背景や自校の教育活動の変遷を、生徒と先生の対話形式で分かりやすく解説している。生徒がペアで生徒役と先生役になり、学校案内を読み合ったクラスもあるという。

◎記入例は示さず、生徒が自由に記入

ポートフォリオは記入例を示さず、生徒が自由に書けるようにした。内藤浩悟教頭は、その理由を次のように語る。

「実は記入例を用意したのですが、教員間で話し合い、配布を止めました。例示に影響されずに、自由に発想してほしいと考えたからです。目標や『To-Do List』の内容が、

図1　鳥屋野中学校の教育目標

教育目標　未来を創る生徒

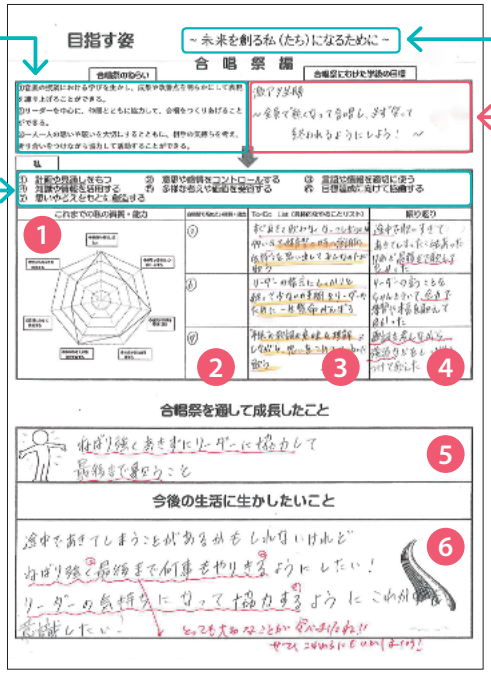
重点目標
- 志を立て実践する
- 考えを吟味し判断する
- 他者を尊重し協働する
- 感性を磨きよりよいものを創造する

鍛え育む資質・能力
- 計画や見通しをもつ
- 意志や感情をコントロールする
- 言葉や情報を適切に使う
- 知識や技能を活用する
- 多様な考えや価値を受容する
- 目標達成に向けて協働する
- 思いや考えを基に創造する

＊鳥屋野中学校提供資料を基に編集部で作成。

＊　学校案内「Toyano Junior High School 2020」は、同校のウェブサイトに掲載されている。右記URL参照。http://www.toyanojhs.city-niigata.ed.jp/data/2020/leaf2020.pdf

図2　学校行事での目標と振り返りを記入するポートフォリオ（合唱祭で生徒が実際に記入したもの）



行事のねらいを明記し、生徒・教員が共有

7つの資質・能力を常に明記

教育目標を最初に掲げる

左記の行事のねらいを踏まえ、クラスで話し合って決めた行事のクラスの目標を記入

ポートフォリオの書き方

❶7つの資質・能力の自己評価を5段階で記入する

❷行事のねらいと❶を踏まえて、今回の行事で高めたい資質・能力を選ぶ

❸❷の到達に向けて行うことを考えて、To-Do Listとして記入する

❹行事の終了後、自分が掲げた目標やTo-Do Listを見ながら、自身の活動を振り返る

❺行事を通じて、自分が成長したと思うことを記入する

❻行事を通じて学んだことを今後の生活にどう生かしたいかを考える

＊鳥屋野中学校提供資料を基に編集部で作成。

写真1「学校案内」では、生徒と先生の対話形式で、教育目標を設定した背景や、達成を目指す7つの資質・能力を鍛える方法について説明。

初めは漠然としていても、活動を進めるうちに具体化し、自分の言葉で表現できるようになることを期待しました」

生徒が記入したポートフォリオには、担任が読んでコメントを添える。目標達成のための行動は、最初は「頑張る」のように抽象的でも、次第に「分からない場合は友だちに聞く」「生活などでそれがどのように使えるのかをメモしたりする」などと、より具体的になっていくという。

◎生徒相互に見られるようにし、刺激し合う機会に

生徒が書いたポートフォリオは、廊下に貼ったクリアファイルに保管している（**写真2**）。他者に目標を見られることで頑張ろうという意欲につなげたり、他者が書いた内容に刺激を受けたりしてほしいというねらいがある。

「PDCAサイクルを回す経験によって、学びの土台を築き、将来的には自身の学びをデザインできるようになることを願っています。また、ポートフォリオを、文部科学省が2020年度から導入した『キャリア・パスポート』と連動させることで、上級学校へとつなげる予定です」（小川校長）

◎生徒への声かけにも活用

生徒の成長が可視化されたポートフォリオは、生徒への声かけにも活用。また、生徒による学校評価につながることも期待している。そして、生徒への声かけは、7つの資質・能力を意識したものになりつつあると、内藤教頭は語る。

「授業に集中できていなければ『意志や感情をコントロールできているかな？』、グループ活動の前には『多様な考えを受け止めることが、よりよいものを生み出す出発点になるよね』などと、7つの資質・能力を想起できるように伝えると、教員の言葉が生徒の中にすっと入っていくようです」

日々の様々な活動に教育目標を意識できる機会があるため、生徒も教員も教育目標をすらすら言えるという。

◎日常的な教育活動を生徒主体のものに

ポートフォリオ導入のねらいの1つである生徒主体の教育活動も、着実に進化している。例えば、体育祭では、新型コロナウイルスの感染予防策を考慮した競技や応援の仕方などを、生徒が考えて創り上げた。また、掃除は決まった時間に一斉に行うのではなく、班ごとに持ち場を設定し、休み時間や放課後など、各班が決めた時間に行うこととした。

「コロナ禍で教員は経験のない対応を迫られ、それならば生徒と一緒に考えるという発想に至りました。そこで予想を超えて成長していく生徒の姿を見て、教員の指導観は生徒に任せるものへと変わりつつあります」（小川校長）

マスクを作って近隣施設に寄付したり、3年生を励ます会を行ったりと、生徒の主体的な活動も広がりを見せている。そのように工夫して楽しみ方を生み出すことは、生きる力そのものだと、小川校長は力を込めて語る。

「生きる楽しさは与えられるものではなく、自分たちで創り出すものです。そのためにも、生徒たちに自らを見つめ、試行錯誤する力を培っていきます」

写真2　ポートフォリオは、教室前の廊下の壁に貼ったクリアファイルに保管。生徒同士が内容を見られるようにしている。